# ちょっとそこまで ～お散歩日和（地域編）～

# 田柄緑道

学生時代のことです。当時のベストセラー作家だった森村誠一の新作タイトルが「暗渠の連鎖」。しかし、漢字が読めない。「暗渠」ってなんだと辞書を引きつつ、それでもさっぱりイメージできなくて中身以上のもやもや感をもったことを覚えています。

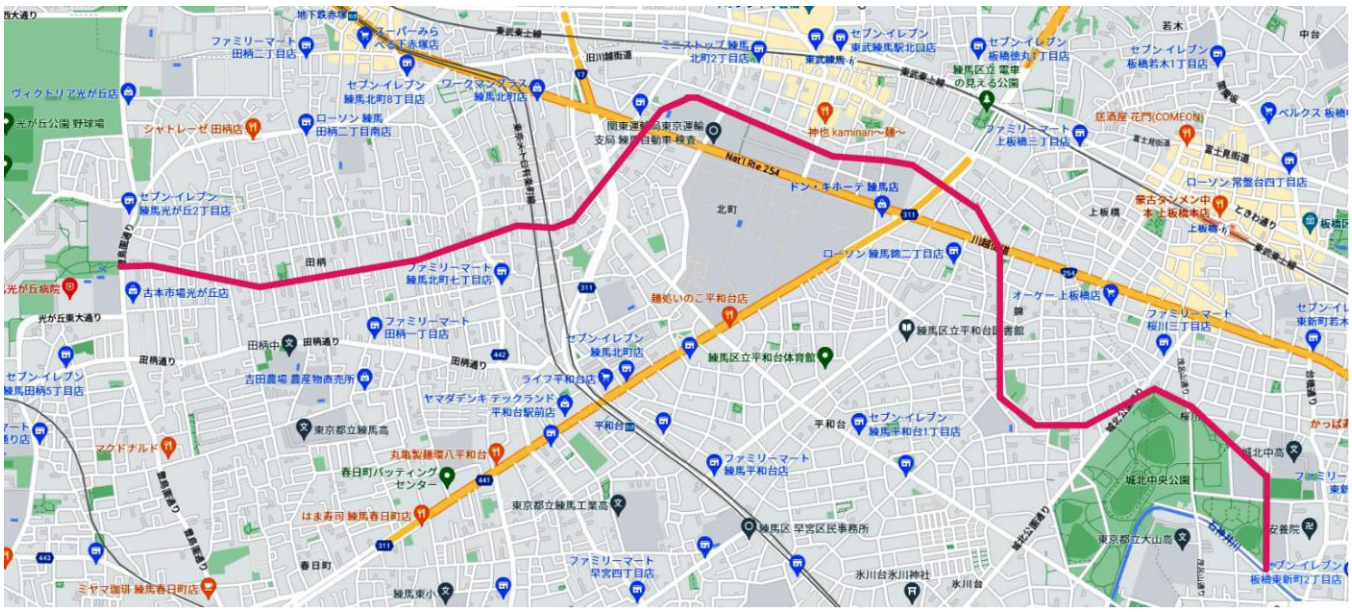
以前、光が丘公園北口周辺にあったお玉が池から白子川に流れていた清流が暗渠化され、住宅街の間を縫うように遊歩道として整備されている場所をレポートしたことがあります。探検心をくすぐる、なかなかスリリングなひと時を過ごせたので、これからも、折を見て、光が丘周辺の暗渠をテーマに紹介していきたいと思っています。

東京は暗渠の宝庫です。その歴史は、高度経済成長期に都市化・宅地化が進んだことで始まったと言ってよいと思います。理由は、宅地化の進行に対して下水道の整備の遅れが原因でした。大量の生活排水により小川はドブと化し、猛烈な悪臭と蚊の発生源として人々を苦しめました。また、ひとたび台風などでは雨水があふれ住宅地を襲っていきました。加えて、東京では１９６４年のオリンピック開催に合わせて、都市の体面を整える目的で暗渠化が一気に促進されていったのです。

水面に蓋をされ、見えなくなったり下水道となったりして失われた川、それが暗渠です。そして、東京の町には、こうした暗渠が無数に潜んでいるというわけです。それを追いかけて楽しもうという試みです。ちなみに、こういう暗渠対象の探索を趣味としている人たちのことを暗渠ハンターと称するのだそうです。

今回取り上げたのは田柄川です。現在は「田柄川緑道」として整備され、遠く、城北中央公園で石神井川に注ぐまで続いています。正確に言うと、練馬区内は田柄川緑道ですが、板橋区に入ると「桜川緑道」と呼ばれます。ちょうど城北中・高校周辺のわずかな距離ですが、行政の矜持かもしれません。約５キロの道のりで、目的地も城北中央公園なので、途中はもちろん、目的地でも楽しめる散歩コースと言えるでしょう。ただ欠点は、帰り道の交通機関がなくて、ちょっと苦しいかもしれません。

暗渠になる前の田柄川の様子



田柄川緑道
大正橋
田柄川幹線水位状況
現在の水位
あやとり

ただただ写真を並べるだけで何の芸もないと思われたでしょうが、敢えてそうしています。探検と発見の喜びを残しておきたいからです。途中出会った植物の数々も本当は掲載したかったほどです。

ところで、暗渠ハンターの話によると、暗渠の楽しみ方は、大きく分けて３つの入り口があるそうです。

その第一が、路上で見かける面白い事物や、違和感のある景観です。第二が、地図や地形から得られる気付きです。そして、第三が、その土地の歴史的な接触です。これらは言い換えれば、ミクロ・マクロ・タイムラインという異なった尺度や視点からのアプローチであるとも言えるでしょう。

今回の田柄川は明確に痕跡が緑道という形で整備されているので楽なのですが、一般的にはその痕跡がはっきりせず、途切れ途切れであることが多いものです。したがって、その痕跡を必死に探し求めることになります。暗渠ハンターは、これを「暗渠サイン」と呼びます。それらを簡単にまとめてみると、

①川が流れていたころの遺構……橋の跡、護岸の跡など
②暗渠に特有の構造物や環境……路地の入り口の車止め、路上に設けられたコンクリート蓋、連続するマンホール、不自然に細長い空き地や縁遠・公園など
③川や水に関連する事物や景観……銭湯・米屋・染物屋などかつて川にかかわっていた業種の店舗や、池や湧水、弁財天など

となります。

こうして「点」が見付かると、次に「線」として繋げていくことになるわけです。その時の手掛かりが地形です。水は高い所から低い所に流れますから、暗渠をたどることは水の流れに沿って地形をなぞることに他なりません。それが、蛇行のフォルムをそのまま残した路地であったり、向かい合って対になった階段や坂・窪地や折戸地形であったりして、かすかに残っていることが多いのです。ちなみに、地名で「戸」は場所を表します。したがって、「折戸」は坂の下りる所、または「狭い所」を意味します。「谷戸」は、丘陵地が浸食されて形成された谷状の地形を意味することになります。その意味で、地名に残っている、谷・沢・井・窪・田・谷戸・谷津・谷地・弦・鶴といった水にまつわる言葉は、その土地の来歴を物語っているので大変貴重な史料となります。さらに、古代人の遺跡などが残っていれば、一気にその周辺全体を俯瞰して見ることも可能となってきます。

このように、３つの視点、ミクロ・マクロ・タイムラインからのアプローチをもって暗渠を歩くということは、失われた川に飛び込んで遊んでいるような気分に浸ることでもあるのです。さあ、あなたも暗渠ハンターになってみませんか。

（終）